

Title	經濟靜學と經濟動學(二)
Author(s)	米田, 庄太郎
Citation	經濟論叢 (1929), 29(4): 517-529
Issue Date	1929-10-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/129803
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 四 第

卷九十二第

行發日一月十年四和昭

論 叢

百貨店稅論

法學博士

神戶 正雄

我國^{ける}に於生命保險業の首唱 其先驅

文學博士

三浦 周行

經濟靜學と經濟動學

文學博士

米田庄太郎

時 論

地租の改正を論ず

經濟學博士

沙見 三郎

說 苑

景氣變動と日本資本主義の發生

經濟學士

谷口 吉彦

預金通貨の造出^{する}に關通説と新説

經濟學士

小川福太郎

明治政府の貸附金

經濟學士

吉川 秀造

雜 錄

獨逸農業の現状

經濟學士

八木芳之助

「獨立財源」の意義に就て

經濟學士

中川與之助

經濟統計^{する}に關國際條約に就て

經濟學士

有井 治

禁漁制度について

經濟學士

岡本 清造

近着外國經濟雜誌主要論題

經濟靜學と經濟動學 (二)

米田 庄太郎

(五) 經濟動學の概念の精練の發展——ホネツ

ガー及びフオゲル、

私は前節(四)に於て、經濟靜學の概念の精練の發展を考察し、精蜜科學的動機の要求に従ふて、經濟靜學の概念が今日までに如何に精練され、如何程精確に規定されて來たかを大體上究明したが、夫れによりて考へると、經濟靜學の概念は一般的にバレット及びシユムペターによりて、最も精確に規定されて居ることが認められる。そうして其等の人々も決して經濟動學或は經濟動態を輕視せず、否な之を大に重要視して居るが、併し本來經濟動學は經濟靜學の如くに純科學的に取扱はれ得ないと見る爲めか、又は夫れは只經濟靜學が大成された上で、始めて科學的に取扱はれ得るもので、第一の急務は先づ經濟靜學を大成することであると考へるが爲めに、經濟動學の概念の規定及び經濟動學的問題の研究は、科學的見地からは、一般に附隨的な或は第二次的なも

のとして取扱はれる傾向がある。かくて其等の人々の經濟動學の概念の規定は、經濟靜學の概念の規定の如くに精確でない、否な一般に粗雑である。隨ふて吾人は其等の人々から、經濟動學の概念の精確なる規定を學ぶことが出來ない。要するに吾人は其等の人々によりて經濟靜學の概念の精確なる規定を學ぶことが出來るが、經濟動學の概念に就ては、之を學ぶことが出來ない。それで私は次に現實科學的動機の要求に隨ふて、専ら經濟學の現實科學化に力を注げる人々に就て、經濟動學の概念が如何程精練されて來たかを考究したいと思ふ。

さきに私が今日の米國經濟學の根本的一方針、否な其の最も有力なる方針として舉げた制度經濟學は、經濟學の現實科學化の發展に於ける最も著しき企だての一であると考へるので、私は其の方面から見て、之を方法論上から批判的に考究せんとするのであるが、併し夫れは後に特に詳しく論述せんとするものであるから、本節に於ては只獨塊の經濟學に於ける同一の方針が、近頃如何に發展して居るかを考察するに止める。但し此處に先づ獨塊に於ける經濟學の現實科學化の企だて、或は經濟動學の概念の精練が、今日如何に發展して居るかを考察して置くことによりて、後に米國に於ける同一の方針の發展を考究するに當つて、一層よく又深く其の意義を了解することが出來ると思はれる。

却說獨塊の經濟學に於ても、今日の米國の經濟學に於て見るが如く、精密科學的動機の要求を

出来るだけ充分に満足させる爲めに、經濟靜學の概念或は經濟靜學と同一視される純粹經濟學の概念を精練し、之れに相應しき靜學的經濟學體系或は純粹經濟學體系を建設せんとする方針に反對して、現實科學的動機を要求を充分に満足させる爲めに、經濟動學の概念、或は動學的經濟學の概念を精練し、之れに相應しき經濟學體系を建設せんとする方針は、近來殊に著しく發達して來たので、私は此處に少なくとも Vogel, Fellen, Landauer, Voegelin, Honegger 等の著書及び論文に就て、經濟靜學或は靜態經濟學の方針を排斥して、經濟動學或は動態經濟學を重要視する傾向の近來の發達を一般的に究明し、夫れに従ふて經濟動學の概念が如何に精練されて來たかを考究したいと思ふが、併しそうするだけの紙面の餘白はないから、只其の内で特に代表的なものと思はれる Honegger と Vogel との所説に就て、考察するだけに止める。

Emanuel Hugo Vogel, Die Theorie des volkswirtschaftlichen Entwicklungsprozesses und das Krisenproblem, 1917. Joseph F. Fellen, Die Umlaufgeschwindigkeit des Geldes, Sozialwissenschaftliche Forschungen, Abt. I. Carl Landauer, Grundprobleme der funktionellen Verteilung des wirtschaftlichen Werts, 1923. Erich Voegelin, Die Zeit in der Wirtschaft, Archiv für Sozialwissenschaften und Sozialpolitik, 1924. Hans Honegger, Zur Krisis der staatlichen Nationalökonomie, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft, 1924.

先づホネツガーが、右に挙げし論文に於て論述する處を見るに、彼は經濟靜學論の最も重要な諸見解を、總て夫れ自身の中に含有するものと見て、シユムペター及びオッペンハイマーの説を特に詳して論評し、先づ彼等の主張する如く、「總てのよき理論は本質的に靜學的であつた」

とか又「ある」とか、或は「靜學は一切の科學的目的に對して必要缺く可からざるものである」とか見て、靜學が構成されなければ嚴密に云ふ科學は存在しないもの、如く考へることは、つまり假想の一種或は空想に過ぎないものにして、事實上正當でないことを論證せんとして居る。そうしてそれよりホネツガー自身の見解を簡單に論述して居るが、彼の論述する處によれば、科學は先づ第一に生活に役立たねばならない。「藝術の爲めの藝術」の見地と同様なる、「科學の爲めの科學」の見地を經濟學に適用して、徒に「純粹理論」に憧憬することは、經濟學の正當な途ではない。世界大戰後、多數の緊急なる實際的大問題の前に立つ今日、吾人は經濟學に於ても最早全く「純粹理論」の如き贅澤物の爲めに、力を費やすことは出来ない。そうして理論を生活の欲求或は必要に順應させると云ふことは、今日では以前よりも一層肝要である。(云ふまでもなく、理論は實際或は實行の下婢たる可きものでなく、其の主人たる可きものである。)そうして科學及び理論の任務を右の如くに解するに於ては、明かに動學的方針をこる經濟學の正當なることに對して、最早何等の疑惑も存しない。此の見地から見れば、「總てのよき理論は靜學的である」と、云ひ得られると全く同一の權利を以て、「總てのよき理論は動學的である」と云ひ得られる。但し前者は理論の内部的、論理的完結性及び普遍妥當性を重要視し、後者は現實或は實際に於ける重要な現象の説明に對する、理論の効用性或は有用性を重要視するものである。そうして右の二種の見解の

何れを是とす可きやは、恐らくは人間が學問する以上永久に争はれる問題にして、普遍的に決定されることは不可能であらう。

ホネツガーは更に科學的研究と靜學的研究とを根本的に同一視する見解の根柢に存する重要な思想として、「只測定し得られるものゝみが科學的であるが、然るに測定し得られるものは只靜態だけであつて、動態は測定し得られない、尙ほ只量的に決定し得られるものゝみが、測定し得られるのであるが、然るに只靜態に於てのみ諸量は相互に比較し得られるのである」と見る思想を論評して居るが、彼の考へる處によれば、理論の第一の又最重要なる任務は、數量測定ではなくして本質規定である。一定の現象の内部的本質、其の意味、及び他の現象との關係に於ける其の地位を決定することは、先づ第一に肝要である。そうして然る後に吾人は更に、充分に限定し得られ、かくて相互に比較され得る數量が存在するかを云ふ問題を、始めて呈出し得るのである。

多くの經濟學者は、靜學的考察法は殊に所謂物價問題に於て必要缺く可からざるものであると、認めて居る様である。そうして市場に於て絶えず數量が現はれ、又其等の數量は只靜的關係の承認によりてのみ、相互に比較し得られるのであると云はれて居る。夫れは疑ひもなく正當である。併し此處に問題となるは、其等の數量は果して最も深く經濟學的考察に對して、眞に相互に比較し得られ、相互に於て測定し得られるか、又其等の前定の下に於て行はれるか、この比較及び測定は、眞に國民經濟學の特有の任務であるかと云ふことである。總ての經濟學者、殊に境界効用派の學說によりて訓練された人々は、同一の市場に於て異なる時に、或は異なる市場に於て同時に呈出された二つの商品は、決して同一の交換價格或は代價を有しないことを熟知する。そうして普遍的價值尺度即ち貨幣の絶へざる内面的價值變動を全く觀過するも、代價或は物價は「需要供給の關係」に従ふて、一層適切に云へば一般的及び特殊的經濟事情或は景氣の變動に従ふて、つまりは全く「不可量的」な諸勢力の作用に従ふて、

絶へず動搖する。一定の商品の例へば金の内部的價值恒定性の假定は、經濟的日常生活の「靜學的應急手段或は間に合せ物」に外ならないので、誠實なる理論の全く關係す可からざるものである。物價問題に於ける當面の經濟學的問題は、寧ろ、市場物價の動搖及び變動の上に決定的影響を及ぼす處の、其等の「不可量的なるもの」(Impponderabilien)の本質及び現象形態を探究することである。併し此の探究を立派に達成し得るもの、否な之を達成し得る唯一のものは、動學的探究法である。國民經濟の動學的考察法は、科學の要求或は科學の本質と甚だよく相合する、一定の關係に於ては靜學的考察法よりもよりよく之に適合する。そうして夫れは何よりも第一に、靜學的考察法よりは遙かによりよき又偏見に囚はれない本質規定を成就し得るのである。

終りにホネツガーの論する處によれば、此の靜學(靜態)か動學(動態)かと云ふ全問題に於ける決定的事實は、吾人は今日では靜學的經濟學が呈示し、又必要とするが如き極端な理論的詭辯を、最早弄して居ることが出來ず、かゝる平和な、純朴な思想的羊飼戀愛劇を最早演じて居ることが出來ないこと云ふ、單純なる認識である。

吾人の時代は甚だ賤者、健實ならんことを吾人に要求する。今日吾人は實際的生存問題を解決す可き使命を有する科學に於て、極端なる思想遊戲をなさんとする氣持も、亦之をなす閑暇も有しない。國民經濟學的理論も亦此の變化せる時代精神に適合し、より多く健實な、より少なく詭辯的な或物とならねばならぬ。世界戦争前國民經濟學は、靜的經濟生活を喫する權利を或程度まで有して居たと云ひ得られ、世界戦争前百年間にあつては、西歐國民經濟は眞に深刻なる内部的震動を免除されて居たと云ひ得られる。週期的に繰り返す資本主義的經濟危機は、人々が靜態と稱せる其の一定の順當狀態からの偏斜として、適切に考へ得られた。然るに世界戦争によりて其等の事態は根本的に變化した。とは云へ、吾人は決して實利的でさへあらば、非科學的であつてもよいと云ふのでも、亦淺薄な實利主義を鼓吹せんとするものでもない。國民經濟學と云ふ莊嚴なる精神科學は、其の學說の一義的な、明瞭なる概念規定及び充分なる認識的基礎を、大に重要視せねばならぬことは、云ふまでもない。そうして此處に何よりも肝要なるは、古代希臘人の大徳、即ち中庸の徳、總ての物に於て正當なる釣合を見出す術を行なふことである。

かくてホツガーの確信する處によれば、經濟學的理論に對する時代の要求は、明かに動學的なる一の經濟學——經濟靜學を精々の處で、思想上の一假構、最後の一思想尺度、遠大なる一背景と云ふ意味に解して、其の一切の考察に適用するに止る一の國民經濟學——を確立することである。

時勢に應ずる經濟學は、シユムベターが停止せる點から始め、彼の指示せる途を進まねばならぬ。シユムベターは彼の愛と注意の全體を、靜的な一様に動く經濟に注いだ。古代希臘のエレア派哲學者と同じく、彼は「永久的實在」の法則を求めた。彼は決して經濟動學の存在を知らなかつたのでない。否、彼れと同代の經濟學者の多數よりも、遙かに重要な現實性を之れに認めて居た。併し彼は此の「發達現象」の世界、永久に安定しない變動の深き研究は、科學的には充分なる價值を有しないものと考へた。されば世界戦争後の國民經濟學的理論は、まさしくシユムベターが本來蔑しめた此の世界を、注意深き觀察の對象となさねばならぬ。夫れは「總ては流動する」と云ふヘラクリトの知識から出發し、云はゞ混沌中から或意味を見出す可く勉めねばならぬ。

以上述べし處によりて、吾人はホネツガーが經濟靜學を偏重する方針を排斥し、經濟動學を大に重要視するは、如何なる精神及び意味に於てあるかを明かに學ぶことが出来る。又私は世界戦争後の今日に於て、彼が經濟動學を重要視する精神及び意味に、重要な意義を認める。併し彼の經濟動學の概念は、上に述べし處によりて察すれば（但し彼は彼の經濟動學の概念を組織的に論述して居ない）方法論的にはつまり經濟動學、かくて經濟學を、一の哲學的及び實際的な學科と見るものであることは明白である。されば吾人は彼から、經濟動學の概念の正當なる科學の規定を學ぶことは出来ない。

次に私はフオゲルの説をさきに挙げし彼の著書（Die Theorie des volkswissenschaftlichen Entwicklungsprozesses und das Krisenproblem, 1917.）によりて考察するに、彼は國民經濟の基本的事實として認めらる可きものは、靜態（靜學）であるか、又は動態（動學）であるかと云ふ問題は、經濟理論的把握全體の根本的及び方向指定的問題であると考へて、同書第一篇第四章を全く此の問題の研究に當て、そうして特にシユムベターの説を詳しく論評して、自説を述べて居る。私は彼のシユムベター説の批評には、大に興味を感じて居るが、併し此處で詳しく述べることは出来ない。

いから、只其の要點を簡單に述べるだけに止める。

フオゲルは先づシユムペターの經濟靜學論を詳しく批評して居るが、此處に其の最も根本的な思想を簡單に説述すれば、要するにシユムペターの云ふが如き、純粹なる意味に於ての經濟主體なるものも、靜的經濟なるものも、靜的狀態なるものも存在せず。存在するは只大なり小なり動的素質を有する經濟主體だけ、只動的なる經濟經營だけである。かくてシユムペターの經濟靜學の理論は、實證的現實態との關係を全く離れたる、抽象的思想構成物に過ぎないものにして、現實なる個々の柱を以て建築されたる殿堂でなく、空中に畫かれたる樓閣である。そうして彼は靜學的諸概念を、到底嚴格には固持し得ずして、潜かに動學的諸概念を混入して居るに拘らず、唯一の純粹經濟學としての彼の經濟靜學に於ては、只價值及び物價の理論、并に物價的性質を有するものとして地代及び貨銀の理論が組織的に論究され、又夫れに結び附けて資本概念、貨幣論及び分配論に關する或一般の學說が論述されて居るだけで、新資本の成立や、最も重要な二つの所得の途、即ち企業家利得及び資本利子を始め、總て發達性の顯著なる諸現象は全く取扱はれて居ない。かくて純粹經濟學は、只抽象的思惟諸形式の精密的一體系を表現するだけのものであると見るシユムペターの見解は、結局經濟理論の壞崩に導き、經濟理論の最大諸價值、及び科學的經濟學の進歩に對して決定的重要を有す可き發達諸可能を、理論經濟學から排除するに

至つた。夫れよりして經濟の靜態と動態とを區別し、又夫れに基いて經濟學の科學的任務を區別することは、共同的基本思想に従ふて建設され得ると考へられる理論經濟學の範圍内に於て、果して正當であるかは問題となる。尙ほ更に、結局靜態は經濟現象の動態的把握と相並んで、國民經濟の一基本的事實として考へ得られるか、問題となる。フオゲルは右の二問題は否定的に答へざる可きものであると論じ、そうして其の根本的理由を約述して左の如く述べて居る。「生活の事實は抽象的理論によりて支配され得ない。換言すれば理論は有効であり、吾人の認識の案内者となる可くは、常に先づ第一に眞實であらねばならぬ。只理論の前提の眞實及び自由からのみ、理論の創造力が湧出するのである。」(S. 190.)

フオゲルの此の言述の意味は曖昧にして、シュトレラーの如きは嚴しく批評して居るが、併し此處に彼が「支配する」と云ふは、つまり「有効であり、又吾人の認識の案内者となる」と云ふ意味に過ぎないと思ふ。又「眞實であらねばならぬ」と云ふは、抽象的でなく、具體的現實的であらねばならぬと云ふ意味であることは、同書全體を通讀すれば明かに覺られる。要するにフオゲルの眞意は、理論が生活の事實を支配し、即ち有効であり、吾人の認識の案内者となる可くは、夫れは抽象的でなく、具體的現實的であらねばならぬと云ふに在ると察せられる。併し夫れにしても彼の「理論の前提の自由」と云ふことは、曖昧である。

フオゲルは次にシムペターの經濟發達論或は經濟動學論を詳しく論評して居るが、此處ではヤハリ其の最も根本的な思想を簡単に説述するに止める。要するにシムペターは經濟發達の本質を、つまり一の均衡狀態から他の均衡狀態へ移行行くことであると解し、根本的には經濟靜態の概念に基いて、經濟動態の概念を規定して居る。かくてシムペターの云ふ經濟靜態なるものが、現實的なものでなくして一の抽象的假想物であると同じく、彼の云ふ經濟動態なるも

のも、結局現實なる經濟發達を意味するものでなく、一の抽象的假想物を意味するものとなつて居る。靜學的經濟學の抽象的形像を經濟發達論の基礎或は出發點となすことは、現實態を單純化されたる形態に於て吾人に呈示するのではなく、虛妄な、人工的な、生命のない形像を吾人に呈示するので、其の形像の諸線は、一切の經濟理論の終極目的としての經濟的現實態の理論的把握に對して、何等の新しき、或は何等の實際に適用し得られる正當なる知識をも媒介し得ない。更にシムムベターの所説を徹底的に推しつめて行くと、結局靜學的理論は何等かの動學的理論を前定せねばならぬこと、かくて動學(動態)なくして靜學(靜態)は存立し得ないことが覺られる。蓋し人間及び財貨に於ける自然的生長及び増加の結果として、かくて新しき經濟單位及び企業の自然的發達の結果として、與へられたる經濟關係の絶へず變動することは、(内部から生ずる一切の變動を全く觀過するも、)一の本質的な、捨象し得られない基本事實であるからである。

却說以上述べし處によればフオゲルは眞實に實在するものは只經濟動態のみにして、經濟靜態なるものは夫れを前定して、夫れから抽象的に構成されたる假想に過ぎず、隨ふて經濟的現象の動的把握と相並んで存立する、國民經濟の基本的「事實」として認めらる可きものでなく、かくて現實なる經濟生活は經濟靜學によりて、或は之を基礎として、科學的に理解されるものでなくして、只經濟動學によりてのみ、其の眞實なる理論的認識は確立されるものである、要するに眞の

理論經濟學は只經濟動學としてのみ存立するものであると考へるのである。然らば彼の經濟學即ち經濟動學なるものは、方法論上如何なるものであるかと云ふに、私の見地から見れば、只彼の方法論的根本原理は何であるかを見定むれば、其他の點に就て此處に詳しく述べる必要はないと思ふ。そうして彼が經濟學の方法論的根本原理と認めるものは、彼の著書の序論中に見出される左の言述によつて、明かに覺られると思ふ。

「吾々は國民經濟學は根本的に一の經驗科學であると云ふ思想から出發すると、直ちに今日盛んに論議されて居る一問題に遭遇する。夫れは純粹認識の外に評價、即ち目的に従ふての評定も亦行はる可きか、換言すれば經濟現象の價值判斷、即ち一の目的論的考察は許され得るか、否な結局必要缺く可からざるものであるか、或は研究は全く「實在研究」の途のみを歩む可きか、かくて只客觀主義的に事實、其の因果的連結及び統計的に把握し得られる法則性等のみから出發す可きかと云ふ問題である。……」此處では只吾々の特殊問題、即ち發達と危機問題との關係及び連結に關して前するに止めるが、吾々は左の點を強調する。即ち吾々の考へる處によれば、經濟發達及び夫れによりて惹起されたる運動現象の認識は、歴史的倫理的考察の意味での目的論的評定及び評價なくしては可能でなく、排他的な或は純粹な實在研究は問題になり得ないと云ふ事である。是れ國民經濟はまさしく其の發達に於て倫理的社會的目的構成物として現はれるからである。但し倫理的社會的目的構成物は只其の法的な、社會的な又歴史的に生成せる組織條件と結び附いてのみ、評定され得るものである。是れ倫理的社會的構成物は只其等のものと結び附いてのみ、生命意義及び内容を獲得するからである。……經濟現象は法律的及び社會的事實の一系列と連結するものである。故に當に其の實在の諸要素のみならず、更に其の目的生活の現象、過現末に於ける其の發達の現象も亦、追究する可きである。然るに此等の現象は夫れ自身に於て既に、歴史的倫理的意味での現實的諸現象の目的論的評價なくしては、考へ得られないものである。

右に述べし處によれば、フオゲルが唯一の理論經濟學と認める經濟動學は、つまり一の倫理的歴史的學科、即ち哲學的一學科、詳しく云へば歴史哲學的一學科にして、純粹なる科學でないことは明かである。されば吾人はフオゲルの經濟動學の概念によりても、やはり經濟動學の正當な

る科學的規定を學ぶことが出來ないのである。

却説私は前節に於て經濟靜學を大に重要視する人々の、經濟靜學の概念の精練を考察すると共に、夫れに伴ふて規定されたる經濟動學の概念をも考察し、更に本節に於ては特に經濟動學を重要視する人々に就て、經濟動學の概念の精練を考察したが、併し何れの經濟學者も結局經濟動學を純科學的なものと考へず、根本的には哲學的なもの、一層詳しく云へ歴史哲學的なもの、又は哲學的及び實際的なものと認めて居ることが發見される。要するに今日までの處では、經濟靜學の概念は純科學的に餘程精確に規定されて居るが、併し經濟動學の概念は、主として哲學的なもの、或は哲學的及び實際的なものとして規定されて居るだけで、科學的なものとしてはまだ精確に規定されて居ない。然らば經濟動學は到底科學的學科としては規定し得られないものである。是れ經濟學方法論に於ける甚だ重大なる一問題であると私の考へるものである。尙ほ更に經濟靜學の概念は今日までに既に、純科學的に餘程精確に規定されて居るが、しかも夫れは科學を方法論上自然科學と同一視する意味に於てある。即ち方法論上自然科學と稱せられるものとして、經濟靜學の概念を規定せるものである。併し經濟學は其の最根本的方面或は部門に於て、果して自然科學として成立し得るものであるか。是れ今日の學問論上から考へて當然起る可き、經濟學方法論の最根本的問題である。但し是れは只經濟學方法論の最根本の問題であるのみなら

す、一切の社會科學方法論の最根本的問題、即ち社會科學一般方法論の最根本問題である。併し私は本論文に於ては、先づ經濟動學の概念は哲學的な、又は哲學的及び實際的な一學科としてではなく、經濟靜學の如く純科學的な即ち純自然科學的な一學科としては、到底規定し得られないものであるかと云ふ問題を考察し、然る後に經濟學は其の根本的部門に於て、自然科學として果して成立し得るか云ふ問題に進むこととする。そうして此處に私が右に述べし如く、先づ經濟動學の概念は純科學的即ち純自然科學的一學科として、從來經濟靜學の概念が然るものとして規定されたと同様に、精確に規定し得られるかと云ふ問題から論究し始めんとするは、近頃右の問題を肯定的に解決せんと企だてる一新著を見當つたからであるので、其の新著と云ふは即ち Dr. Rudolf Steller, *Statik und Dynamik in der theoretischen Nationalökonomie*, (1926) である。それで私は先づシュトレルラーの見解の根本思想を述べ、次に之を批判しつゝ私の見解の一般的方針を述べることにする。